標点

伝える努力、受け止める力

県教育庁財務課長
角田直樹

中学生の頃まで、教師になりたいと思っていた。教師はあこがれの職だった。それは、小・中学校の頃、先生は両親の次に身近な職業を持つ大人であり、優しく、厳しく、そして何より信頼のおける人であったからだ。しかし当時は、その信頼がどこから来るのかはよく分からなかった。

昨年、ドキュメンタリー映画「みんなの学校」を鑑賞した。ご覧になった方も多いと思うが、特別な支援を必要とする子どもを含む全ての児童が同じ教室で学ぶ、大阪市立大空小学校の一年間を追った映画だ。上映が終わった帰り道、一緒に鑑賞した同僚の先生が、「子どもたちはみんな、成長したいという気持ちと、その力を持っている。それを後押しするのが、自分たち教師の役目だと思っている」と言われた。その後、色々な先生方と話す中で、多くの先生が同じ想いをお持ちだと知った。きっと、私の恩師の先生方も同じであったに違いない。子ども心に、その想いを感じ取り、先生への信頼が生まれたのだと、今になって分かった。

時を経て、教師になる夢は移り、行政職として県職員となったが、縁があってのことだろう、昨年度から財務課長として教育行政に携わることができた。無論、教師ではないので児童生徒と向き合う資格はないが、予算編成を通じて本県教育が抱える課題とその解決へのアプローチに、微力ではあるが関わっている。予算、すなわち財政は、言ってみれば行政活動を金銭に置き換えて表したものだ。どんな教育活動をしていくのかということを、お金で示したものが教育予算であり、予算を通じて本県教育の取り組む方向を発信しているともいえる。

また、お金は稼ぐことよりも、その使い方こそ大切である。もとより限られた予算である。あればあったで嬉しいけれど、ない（少ない）ものをどう工夫するか、それは現場と一緒に考えていかなければならない課題だ。

現場の想いを受け止める。県教育委員会の想いを伝える。全ては未来を担う児童生徒のために。しかし、ただ一生懸命に伝えようとしても、一方的な言葉が相手には届かないというのは、恋愛と同じで、かつて身をもって経験したことだ。

子どもの頃は、理屈では分からずとも、ありがたく感じた先生の想いを、大人になった今は、きちんと言葉として受け止め、また、届くように伝える、そんな努力を惜しむまいと思っている。